

〔箋注倭名類聚抄九〕原書果部下品載杏核云、一名杏子、此所引即是、本草和名亦云、杏核一名杏

子、本條千金翼方證類本草題杏核仁、不載一名蓋誤脫、非蘇敬之舊也、傷寒論有桂枝加厚朴杏子

湯、說文、杏、杏果也、李時珍曰、諸杏葉皆圓而有尖、二月開紅花、亦有千葉者、不結實、和名依輔仁、加良

毛々乃波奈、見古今集物名歌、今俗呼安无受、又今俗呼加良毛々者、謂壽星桃、與此不同、

〔伊呂波字類抄加〕植物具、杏カラモ、

〔書言字考節用集六〕杏出、安同、巴同、旦同、杏上、杏子、梅一名甜、杏仁、

〔古今和歌集十〕物名、からも、の花

あふからも、のはなほこそかなしけれわかれむことをかねて思へば

〔和漢三才圖會八十六〕杏音、甜梅、和名加良毛々、俗云阿矣須、杏何梗切音衡、然今呼如姜音略、中

按杏山林及家園皆有之、信州最多、而出杏仁、販他邦、凡桃仁扁長有皺、梅仁圓而尖、杏仁大於梅仁、而

圓微皺、三物宜辨之、

〔古今要覽稿草〕木、からも、あんす、杏

からも、あんす、漢名杏は、花信風雨水二候に配し、梅と艶を共にす、杏は皇國固有の種にあらざ

れども、本草和名、和本草、和名類聚抄等にも、からも、とよみ、古今集物名深養父の歌に、逢からも

ものはなをこそ悲しけれ、又新撰六帖にも、からも、の歌五首あり、今はからも、といはず、あん

すと呼て、何國にも、植て花をめ、實は果となし、仁も藥とし、欬嗽、欬逆、狗毒を解、其外功多し、花も

婦人子なき者、二月丁亥の日、杏花と桃花を取、陰乾して、戊子の日、井華水にて服すといひ、又粉滓

面野にも、杏花桃花を用目共、本草綱目附法、といへり、和漢三才圖會には、信州最多、而出杏仁といへども、今

は伊豫國殊に多く出すといへり、又杏仁を取るに、其皮肉を劃たるを乾し、果となし、煮ても食ふ

といへり、本草綱目集解、宗奭の説に、生杏可晒、脯作乾果、食之といへり、今西土より渡るは、仁大に